



## 「牛飼いの楽しさ」



肉用牛経営：

南魚沼市泉新田 久川 基氏

私は平成12年、65歳の時に脳梗塞で倒れ立つ事が出来なくなりました。5ヶ月間の入院生活を送り、車椅子の生活となりました。入院中のベッドの中で「やっぱり牛飼いが好きなのだ」と感じました。もう一度牛を飼いたいと主治医に話をし、それから歩行のためのリハビリを開始し歩くことがこんなに難しく辛い事とは思いませんでした。「こんなに難儀してまで治らなければならないのかな」と思いましたが、牛を飼いたい一心で頑張りました。今では、力のいる仕事は無理ですが、餌やりや他の細かな管理を出来るまで回復しています。今の飼養頭数は13頭で黒毛和牛を飼育し、1ヶ月1頭の出荷を目指しています。

導入は県内（上越、佐渡）市場ですべて行っております。飼育した牛を共励会等に出品し、入賞した時の喜びは一入のものがあり牛飼いでなければわからない喜びと思います。また、共励会には前夜祭があり、出品者・買参人などが一堂に会します。県下の肥育名人が参集しますのでいろいろな情報交換ができこれもまた、楽しみの一つとなっています。私もいがた和牛肥育名人認定事業で「肥育名人」の認定を受けましたが、まだまだ勉強が足りないことを実感しております。今は、よい牛を作ることが私の生きがいであり、牛舎で導入した牛に餌をやり、どんな牛に仕上がるのか、牛のしぐさの1つ1つを観察しながら毎日を楽しんでいます。牛を飼うことが私にとっての1番のリハビリです。

## 「食の乖離現象」



養豚経営：

新潟市榎町 小田 信雄氏

国をあげて食育が叫ばれています。私共の農場も東京都内の食育をテーマにした学園祭に招待を受け参加して参りました。教育や福祉の現場でも農業や生き物を取り入れた様々な実践が試みられています。更にはポジティブリストの本格的施行を始め、一見過剰かと思われる程、安全性への追求がなされています。どれもが大切なことであり、食べ物にとって重要な課題であることはもちろん間違いではありません。

でも、これらのことが叫ばれば叫ばれる程「食」の現実に大きな疑問と矛盾を感じるのは私だけでしょうか。私たちの食のすべてが生命をいただき、生命を生み、生命を育てています。この生命の認識がどんどん薄れて行き、感謝の心が生活の中から消えてしまいました。教育界の農業体験も「入り口」「出口」の教育になっています。ppmやナノの単位が幅をきかせ基本的食生活習慣がないがしろになっています。美しく並ぶスーパーの店頭からは、食と農の結びつきが見えづらく、益々消費と生産が「乖離」現象を大きくしています。農業の側にも反省点があります。経済の原則の中で生き抜くため、「百姓百品」の経営から単品拡大主義を取り続けて来ました。この生産のスタイルの中に大きな落とし穴があることを忘れていました。畜産業界のあちこちで環境問題のトラブルが発生しています。「〇〇絶対反対」が見えたり、訴訟のニュースが紙面に出ることもあります。みんなが肉や卵、牛乳があこがれの食べ物であった時代にこんなことがあったのでしょうか。農村のどこでも家畜が飼われ、畑が耕され「うまいなあ!!」とその生命が胃袋に納まった時代。どの食一つとして、生産と消費に乖離の現象はありませんでした。食べる人も育てる人も反省の時代です。